

釜山大学校韓民族文化研究所・ UCRC の共同研究プロジェクトを終えて

佐賀 朝
(文学研究科教授, UCRC 所長)

1. プロジェクト開始の経緯とねらい

UCRC は、2010 年以来、釜山大学校韓民族文化研究所との研究交流を継続的に展開してきた。2015 年 2 月、同研究所から所長をはじめ 3 名の研究者を招いて大阪市大で開催した釜山大とのワークショップにおいて、釜山側から共同研究の提案があった(テーマは「都市と共生: 人, 空間(基盤施設), 文化(制度, 政策)」)。

これを受け、UCRC では、同年 5 月の UCRC 運営委員会で釜山から提案のあった共同研究を文学研究科教員・UCRC 研究員を対象とした公募メンバーによって進め、研究科長裁量経費で助成する方針を決定、6~7 月に共同研究メンバーの公募を実施し、メンバーを選定した。

プロジェクトのねらいは、①2010 年以来の釜山大学校韓民族文化研究所との研究交流を、実質的な意味での共同研究に発展させること、②文学研究科教員の異分野間における共同研究を促進し、将来的な学内外の研究資金獲得なども想定した共同研究の萌芽を見出し育てること、③UCRC 研究員の共同研究活動への積極的参加を通じて各自の研究の促進と、UCRC 研究員や文学研究科教員との共同研究の輪を広げること、の三つであった。

2. 共同研究参加メンバーの構成

大阪市大側は、上記の趣旨に沿って、文学研究科教員 6 名に若手研究者 3 名を加えたメンバーを選定した。

- 文学研究科教員
伊地知紀子, 教授, 社会学・文化人類学
川野英二, 准教授, 都市社会学
佐賀 朝, 教授歴史学・日本近現代史
高島葉子, 准教授, 文学・ヨーロッパ文学
滝沢 潤, 准教授(当時), 教育学
(2016 年度, 他大学転出によりメンバーから外れた)
山 祐嗣, 教授, 社会心理学
- UCRC 研究員
稲永祐介, 知識社会学・ヨーロッパ政治史
上原健太郎, 教育社会学・現代沖縄研究
松井広志, 文化社会学・メディア論

(他に全ウンフィ(UCRC 研究員)が共同研究支援者として加わった)

他方、韓民族文化研究所側は、両組織による共著論文集の執筆者を想定して以下のような 5 名の共同研究メンバーを選抜した。全員が研究所の HK 教授である。

- 車喆旭(チャ・ Cholウク), 韓国史学・釜山近現代史
- 李尙峰(イ・サンボン), 政治学・地域政治
- 張世龍(チャン・セリョン), 西洋史学・フランス史
- 趙正民(チョ・ジョンミン), 文学・日本近現代文学
- 趙寛衍(チョ・ガンヨン), 文化人類学

3. 共同研究活動の開始・展開

(1) 2015 年度

プロジェクトは、学内研究会の定例開催と、日韓の両組織合同による共同研究会・国際共同シンポジウムを両軸として活動を展開した。2015 年度の活動は次の通りである。

① 9 月 30 日第 1 回学内研究会(文学部会議室)

市大側参加者全員の自己・研究紹介, 上原・松井による研究報告を行い, 今後の方針などを協議した。

② 10 月 21 日第 2 回学内研究会(文学部会議室)

第 1 回共同研究会に向けて, 山・川野の準備報告と討議を行い, 今後の方針について協議を行った。

③ 11 月 7 日第 1 回共同研究会(釜山大学校)

大阪市大側から, 川野・佐賀・高島・山・稲永・上原, 全の 7 名が参加し, 釜山側参加者の車・趙正民・李・張に加え, 研究所の金東哲所長も同席する形で最初の共同研究会を開催した。

丸一日にわたって, 参加者全員の研究概要紹介と山・李・川野の研究報告をめぐる討議を行い, 今後の共同研究に関する協議も行った。研究報告では大幅に予定時間を超過する形で活発な議論が行われ, かなり突っ込んだ議論が行われた。今後の予定についても, 具体的な協議を行うことができた。

④12月16日第3回学内研究会（文学部会議室）

1月の第2回共同研究会の準備をかねて、滝沢・上原・稲永の3名が研究報告を行い、討議を行った。

⑤第2回共同研究会（文学部会議室）

2016年1月8～9日に大阪市大で開催した。大阪市大側から、伊地知・川野・佐賀・高島・山・稲永・上原、全の8名が参加し、釜山側も車・趙正民・李・張・趙寛衍の5名が全員顔を揃える形で、研究報告と討議を行い、2月のシンポジウムに関する打ち合わせも行った。

⑥第5回国際共同シンポジウム（第3回共同研究会）

2016年2月19～20日に釜山大で、2010年以来ほぼ定期的に開催されてきた国際共同研究シンポジウムの第5回目を兼ねて、本プロジェクトの第3回共同研究会を開催した。釜山側の5名全員と、大阪市大側は、稲永、上原、伊地知、佐賀、滝沢が研究報告を行った。釜山大側からは、研究所教員をはじめとして多くの参加者があり、盛況であった。

以上の研究活動においては、研究報告と討議を一連のものとして実施し、釜山側が予定していた共著論文集の刊行に向けた準備としても位置付けられた。

以上のように、2015年度は、本プロジェクトが研究科唯一の、また最初の研究科プロジェクト推進研究として位置づけられたことで、積極的に両組織の共同討議の場を持つことができた。

(2) 2016～17年度

2016年度は、前年度に研究科プロジェクト推進研究に採用されて国際共同研究を進めたのに続き、2016年度から17年度にかけて、本共同研究の仕上げにあたる研究活動が進められた。なお、2016年度も本プロジェクトは科長裁量経費に基づく支援を受けた。

2016年度は、UCRC研究員はオブザーバーに近い参加となり、滝沢の他大学転出に伴い、主として共同研究に参加したのは、伊地知、川野、佐賀、高島、山の文学研究科教員5名であった。

⑦第4回共同研究会（文学部会議室）

2016年7月2～3日に大阪市大で大阪市大側5名と釜山大側5名全員による共同研究会を開催した。基本的に10名全員の論文執筆に向けた最終的な研究報告を行い、共著論文集の内容に関して突っ込んだ質疑・討論を行った。その結果、共著論文集の基本構成も固まり、2016年末を目途に各自、論文執筆作業を進め、共著論文集を完成させることで合意した。

⑧共著論文集の編集打ち合わせ（釜山大）

2017年3月22～23日には、佐賀・伊地知の2名が家研究支援者（通訳）である全ウンフィとともに釜山大を訪問し、共著論文集の編集打ち合わせと今後の共同研究に関する協議を行い、2017年秋までに行われる韓民族文化研究所の組織再編を待って、あらためて共同研究を今後も継続していくことを確認した。

2017年1月から4月にかけて編集が進められた共著論文集は、2017年5月に、無事、同研究所『都市と共生』として刊行された。

4. 研究成果とその特色

上記の共同論文集に掲載された日本側（UCRC＝文学研究科）の研究者の論稿は以下の通りである。

- ・伊地知紀子「植民地解放後、済州島出身女性の渡日と生活世界」
- ・川野英二「大阪における都市セグリゲーションと市民生活の不安定化」
- ・高島葉子「都市の語りの課題と可能性」
- ・山 祐嗣「都市化における心理学的問題」
- ・佐賀 朝「近現代の大阪における社会的結合の解体と再編—町内会と下層労働力供給業を素材に一」
また、韓国側（釜山大）の研究者の論稿は以下の桃李である。
- ・車喆旭「韓国古里原発周辺住民の生活経験と村共同体—機張郡吉川村の事例から—」
- ・李尙峰「イタリア社会的協同組合の理論的・実践的意味—共生の地域社会づくりの観点から—」
- ・張世龍「オキュパイ運動の経過—空間の占拠と直接行動民主主義—」
- ・趙正民「死と再生の都市ドラマ—沖縄那覇新都心開発を中心に—」
- ・趙寛衍「バルセロナ観光問題の映画表象と社会的リアリティー『バイバイ・バルセロナ』を中心に—」

本プロジェクトの第一の特色は、その学際的性格にある。参加した研究者は、歴史学・社会学・社会言語学・比較文化論・現代文学論・政治学の多彩な領域にわたり、日韓の二つの大学研究組織にまたがる、新たな学際的共同研究の実践である点に最大の特色がある。

第二に、都市大阪を含む多様なフィールドを対象とした地域研究としての性格を有することである。各研究者の主題は、いずれも都市と共生に関わるものであるが、その分析の対象は、大阪や釜山を含む具体的な地域の実態や現実であり、高度な理論的展望を志向しつつも、都市の現場において実践されている共生をめぐる諸営為や、あるいは旧い共同性や共生関係の解体の様相を具体的に

追究した点が重要である。

第三に、歴史と現代を貫くトータルな分析を旨としたことである。参加メンバーは、現代政治や文化を主攻とする者も含めて、歴史的視野をもった研究をこれまでも手がけており、それを強みにしてきた。そのため本研究で行われた都市と共生に関わる分析は、現状分析と歴史的検証の絶え間ない往復を通じて展開された。以上のように、本研究は、専門領域や所属研究機関の垣根を越えた学際的共同研究であるだけでなく、具体的フィールドを対象とし、現実に根ざした共生の実践を問題にし、さらに、歴史—現代を貫く分析を通して、それらの意味づけを行った点に特色があったと言える。

実際、上記の各論稿は、当然ながら各研究者がこれまでに進めてきた研究の延長線上にまとめられたものである。とはいえ、分野や「国籍」が異なる日韓の共同研究メンバーが互いに親交を深めながら、研究会の間では、かなり突っ込んだ緊張感のある議論が行われた。その結果、参加メンバーそれぞれが自らの研究方法や素材へのアプローチを再点検し、自身の研究内容を「都市と共生」という、より広い文脈の中で見直し、その意義を問い直す機会を持たないように思われる。

筆者自身を例にとれば、日常的には近代都市史を専攻し、大阪の現状について直接、発言する機会は多くはなかったが、学際的なメンバーの中で、しかも釜山大学のメンバーとの共同討議の中で、自身の研究の現代的意義を明確にする必要が鋭く求められたこともあり、結果として筆者の論稿でも、現在の「大阪都構想」をめぐる議論との関係にも言及することとなった。

5. 本プロジェクトの内容と意義

本共同研究の重要性は、第一に、大阪市大・釜山大の内容ある研究交流の実績づくりとして有意義であることにくわえ、第二に、現代社会が要請する政治・経済・社会・文化の各領域にわたる都市的・社会的課題への即応としての意味を持つことにある。

「都市と共生」の歴史—現代を通じた研究は、現代都市が抱える不可避の課題を正面から見据えたものであり、多彩な領域にわたる人文・社会系の都市科学を総動員して、現代市民の負託に応えようとするものと言える。

本プロジェクトは、「都市における共生」を主題として、日韓の人文・社会系の都市研究者が共同し、現代都市が抱える政治・経済・文化にわたる問題群に、歴史—現代を貫通する形で学際的にアプローチすることを通じて、その解決の方向性を提示しようとしたものである。

研究メンバーのテーマは、「都市と共生」という主題のもとに整理すれば、以下のような複数のサブテーマに

区分しつつ、それらの相互連関と意味づけが可能である。

①都市周縁領域における社会的亀裂と共生

大阪市大側の研究代表者である筆者佐賀が論じた主題である「近現代大阪における町内会・区政と都市社会構造」は、自身のこれまでの都市下層社会研究などをふまえつつ、近現代大阪の町内組織や学区の変遷を「旧い共同体の解体」の過程として読み解こうとしたものである。こうした町内組織は都市の周縁的社会層を管理・統制し救済する役割も担っており、都市社会の流動化や社会的不安要因の醸成にブレーキをかける役割も担った。

一方、川野による現代大阪の都市貧困分析は、パリとの比較、近代以来の大阪の都市下層の歴史的系譜などもふまえつつ、現代的貧困の実態と、貧困地区のスティグマ化、ジェントリフィケーション（新たな意味付与による再生と貧困層の排除）の様相を社会調査にもとづいて解析したものである。

また、伊地知が進めた大阪—済州島を往復する在日コリアンの生活史分析は、それ自体、20世紀を通じた歴史的視野のもとに、移動する生活者と日本国家、南北に分裂した朝鮮半島という政治枠組みとの緊張関係を問いながら、都市周縁層としての性格を持つ彼らの移動と生活の実態を明らかにしている。ヘイトスピーチに象徴される現代日本の在日に対する社会的排除をも視野に、彼らの存在と多様な位相にわたる共生の実態を通して、国家の枠組みとその意味を再照射する試みとして、本共同研究の主題にアプローチしたものと言える。

さらに、韓国側の車喆旭による現代釜山における原発立地地域の政治社会史研究も、ある種の都市周縁領域の問題を扱うものである。車の研究では、釜山中心市街からわずか20km付近に立地する古里原発の立地とそれに伴う現地社会の変容と軋轢を、現地でのインタビュー調査なども多用しつつ明らかにする。原発の存在やその立地をめぐる社会的亀裂とその修復は、現代日本にも通底する深刻な課題であり、現代における共生の再構築において不可避の課題となる。その展望は容易ではないが、釜山近現代史研究の大家である車の蓄積を活かして、困難な課題にアプローチしている。

②「共生」をめぐる比較文化史—言語文化的アプローチ

本共同研究の研究分野上の特色の一つは、言語文化系の研究者が参加している点にもある。中でも、長期にわたる文明史的視野を持ち、都市的生活様式や文化の特徴に、社会言語学的にアプローチする基礎研究として注目されるのが、山による高コンテクスト・低コンテクスト文化の比較社会言語学的研究である。山は、欧米—個人主義的、アジア—集団主義的といった比較文化把握を排し、比較言語学の視点から社会集団内における言語行為

にまつわるコンテキスト（文脈依存性）の高低を基準として文化的差異を論じてきた立場から、都市的文化の特質を低コンテキスト性から説明する仮説を立て、アジア各地の言語行為資料の収集と分析を通して検証している。共生の基盤でもあり結果でもある言語のあり方に着目して、都市文化の性格を明らかにする作業は、歴史－現代を貫通させて共生を論じる本プロジェクトにおいて、基盤的位置を占めると言えよう。

同様に、言語文化系の事例研究を通して都市と共生に迫るのが、高島と趙正民の研究である。高島の現代ストーリーテラーの比較表現文化論は、自身の民話分析の成果と方法をふまえて、現代の「語り部」たる「昔話」テラーの欧米・日本・韓国における語りのあり方と、語るストーリーの特質を、その文化的背景にまで遡及しながら論じることで、語る場と「語り・聞く」共生関係の現代的変容を問題にしている。

一方、趙正民の現代沖繩「副都心」の場所性論は、沖繩戦における激戦地が現代の再開発によって大きく変容する過程で、都市の「怪奇譚」として死の記憶が「再生」し、都市居住をめぐる現実の社会的矛盾や亀裂と交錯しながら、重層する諸言説のせめぎあい演じられる様相を分析している。

③共同性の解体と再構築

前述の佐賀による近現代大阪の町内組織の研究は、「旧い共同性」の解体過程を論じるものであるが、共生の現状をふまえて、新たな共同性の方向性を模索し、あるいはその困難性を検証するのが、李・張および趙寛衍の研究である。

李の現代イタリア・韓国における社会的協同組合の比較政治学研究は、共同性再生の可能性の一つとして社会的協同組合に注目し、イタリアにおける社会的協同組合をめぐる法・政治論争と、ポーロニャ・カディアイの実践経験をふまえて、その可能性と限界を展望する。

また、張の現代オキュパイ運動の政治空間分析は、ウォール街や香港における都市「占拠」の運動が見せた行動主義と、それが現出させた政治的空間の意味を読み解きつつ、都市における新たな社会運動としての可能性を見る一方、それが孕む新自由主義的な商業主義への回収の危惧にも言及する。

他方、趙寛衍のヨーロッパの都市ツーリズムをめぐる社会的コンフリクト分析は、観光客やそれをめぐる言説の映像表現を通じて、ヨーロッパで社会的論争を呼んでいる現状を、都市における他者と住民の共生あるいは亀裂の観点から分析し、社会的論争を通じて、その「和解」「妥協」が生成しつつある状況を確認する。

以上、三者の研究は、優れて現代的な素材と現代的な問題関心に発して、都市における新たな社会的亀裂とそ

の修復、歴史をふまえた新しい共生の道を展望するものと言えよう。

本プロジェクトにおける各研究者の主題は、以上のように整理可能であるが、それらは、同時に、比較地域研究としての性格も有すると言えよう。

すなわち、(1)釜山・済州島および大阪をフィールドとした比較近現代史である佐賀・川野・伊地知・車の研究や、(2)さらに多様な地域を対象に取り上げた趙正民（現代沖繩）・趙寛衍（ベルリンやバルセロナ etc.）・李（ポーロニャやソウル etc.）・張（ニューヨークや香港 etc.）などの研究がそれにあたる。

また、これらの研究は、全体として、現代文化の諸位相と都市空間における共生・共同の帰趨を問題にし、都市における共同性再構築のためのオルタナティブを模索するものでもある。この点で、現代都市・現代社会が抱える問題に、人文・社会系の都市研究者が正面からアプローチするものとして重要な意味を持つであろう。

6. 共同研究を終えて

正直、2015年度の段階で、釜山大の提案したテーマでUCRC 研究員も含めた学際的研究を、一定のまとまりある形で成果の形に仕上げることが果たして可能なのか、私自身、大きな疑問を感じたままのスタートであった。しかしながら、日韓のメンバーが共同討議の場を重ねる中で、それぞれの問題関心や学問上の立場、アプローチの特徴なども分かってくるなかで、緊張感ある議論を重ねることができたのは幸いであった。方法的に融合できた共同研究が出来上がったかと言えば大いに疑問であるが、たまたま研究科プロジェクトとしうるテーマとして釜山大から「都市と共生」が提案され、結果として、私自身もこのプロジェクトに巻き込まれることで、従来にはない形で研究成果をまとめる機会ともなった。

2017年に韓民族文化研究所はHK 事業の終了に伴い、大規模な改組が行われた。その結果、HK 教授という任期付きの研究職であった先方のメンバーは、いずれも釜山大の専任教員として遇されることとなり、あらためて息の長い国際共同研究をUCRC とも継続していく意向が表明されている。

今後のUCRC と同研究所との共同にとって、今回のプロジェクトが重要な基盤となることを願って、また筆者自身も、引き続き釜山大との交流に関わっていききたいとの意思表示をして、活動報告の責めを終えたい。

（2015～16年度UCRC 運営委員、プロジェクト統括者）